

出稼ぎトンネル坑夫集団「豊後土工」と 日本の植民地開発

谷川 竜一¹

¹ 非会員 金沢大学助教 新学術創成研究機構 (〒920-1192 金沢市角間町 金沢大学)

E-mail: tryuichi@staff.kanazawa-u.ac.jp

本稿は、大分県旧南海部郡で成立した近現代日本の出稼ぎトンネル坑夫集団「豊後土工（ぶんごどっこ）」に関する歴史的研究の中間報告である。トンネルという構造物は、日本の近代化事業や高度成長下のプロジェクトはもとより、戦前のアジア植民地開発や戦後の対アジア賠償工事、海外建設援助を構成する極めて重要な施設であり続けてきた。しかしそうした重要な構造物の建設に、豊後土工のような特定地域出身の坑夫集団が継続的に関与してきたことは知られていない。彼らはいつ、なぜ、そしてどのようにして生まれたのか。筆者はインタビューや地域資料の収集を通じて、その全容解明を近年行っている。本稿は豊後土工を紹介するとともに、地域史や植民地開発史に注意しつつ、近現代土木史のなかに彼らを位置づけることを目的とする。

Key Words: hydraulic power generation, development, technology, Bungodokko, colony, tunnel

1. はじめに——豊後土工とは何か

本稿は、筆者が行っている近現代日本の出稼ぎトンネル坑夫集団「豊後土工（ぶんごどっこ）」に関する歴史的研究の中間報告である。

トンネルという構造物は、日本の近代化事業や高度成長下のプロジェクトはもとより、戦前のアジア植民地開発や戦後の対アジア賠償工事、海外建設援助を構成する極めて重要な施設であり続けてきた。しかしそうした重要な構造物の建設に、特定の坑夫集団が継続的に関与してきたことは知られていない。

一般的に彼らを豊後土工と呼ぶ。豊後土工は大分県の旧南海部郡地域（現在の佐伯市周辺の海岸部）を生活拠点とし、一年の大半を国内外の現場で働いた。新幹線や高速道路のトンネルはもちろん、大型水力発電所の水路トンネルや各都市の地下鉄および上下水道工事など、重要なトンネル工事には必ず豊後土工たちがいたと言われる。しかし、20世紀末にトンネル工事の機械化が進むと、豊後土工たちは次第に現場から姿を消していった。彼らの全体像を明らかにすることは極めて難しいが、1910年代から1980年代にかけて延べ20~30万人と言われる極めて多くの豊後土工が、国内外の現場で働いていた¹⁾。彼らの大半は現在80歳以上となって、旧南海部郡で余生を過ごしている。

彼らは近現代日本のトンネル建設の立役者たちであり、日本やアジアの近代化（時に植民地化）において極めて重要な役割を果たしたと判断できるが、これまでの建築史や土木史では全く知られてこなかった。

筆者の専門は建築史・土木史であり、近年はアジア開発史に焦点を絞り、日本が行った戦前の植民地開発や対アジア賠償工事の歴史、それらに関与した建設関連技術者たちの歩みを分析してきた。その研究のなかで、時折資料のなかに「大分県佐伯のトンネル坑夫」という文字や表現が散見されることに気付いた。しかしそれ以上の情報はなく、彼らを扱った一般関係書籍もほとんど見当たらない。そうした問題意識を出発点として、筆者は2年前より高齢の豊後土工にインタビューをするとともに、彼らのようなトンネル専門の坑夫集団がいつ、なぜ、そしてどのようにして生まれたのか、その後多くの建設工事にいかに関わってきたのかという歴史の解明に着手している。本稿では、豊後土工と植民地開発の接点に焦点を絞り、その概要を記す。

なお、建築史・土木史の観点からの先行研究はほとんど無いと述べたが、医学系の研究や旧南海部郡の各町史、地方新聞記事や郷土史会などに一部豊後土工に関する報告がある。これらの研究の多くは、たくさんの豊後土工がトンネル掘削工事において大量の粉塵を吸い込むことにより、重いじん肺の症状を発症したことと関係がある。

特に 1970 年代以降、医療の進歩や患者からの告発により、じん肺は社会問題化した²⁾。先行研究はそうした状況を受けており、豊後土工が抱えた苦しみを日本社会の問題として受容しようとする真摯な研究が多い。旧南海部郡を構成する各市町村史、大分大学の調査報告文³⁾、1976 年に組まれた西日本新聞の豊後土工特集などがそうした先行研究として重要である⁴⁾。ただし、豊後土工が日本の近現代史や土木史とどのような接点を持つのかという点に関する検討は十分ではない。本稿ではその点を重視しつつ分析を行う。

2. 豊後土工の歴史的背景

豊後土工の出身地である大分県旧南海部郡地域の海岸部は、豊後水道に面したリアス式海岸地帯であり、海岸線の延長は約 270km にもなる。その入り組んだ湾や大小の島々に抱かれたいくつもの浦々が村落共同体の基本単位となっており、それらが集合して上浦、佐伯、鶴見、米水津、蒲江の各市町村を構成していた。今日いずれも佐伯市に編入されている(図-1)。

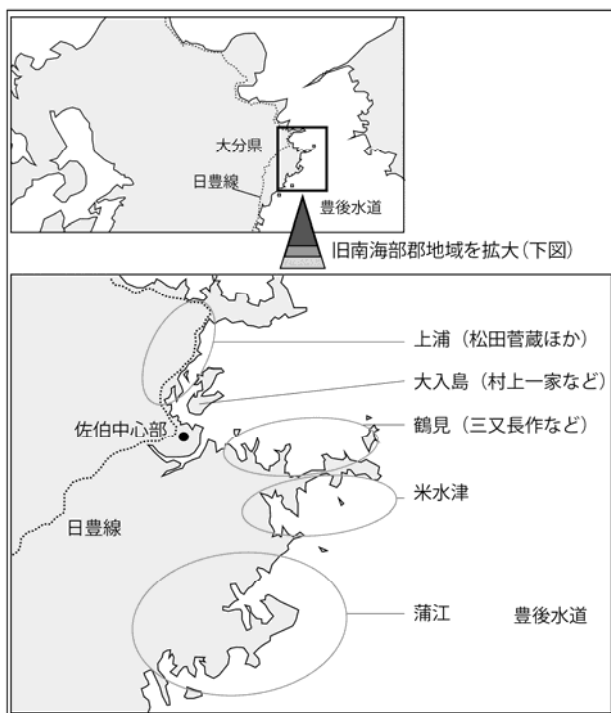


図-1 旧南海部郡周辺図⁵⁾

この地域の人々は、佐伯市を除くと傾斜地が多く平地が少ないという地形の事情に即して、半農半漁の生活を営んできた歴史をもつ。20 世紀における主食も、少なくとも 1950 年代までは米ではなく芋や麦であり、「貧しい」地域とされてきた。しかし海産物は抱負で、「佐伯の殿様、浦でもつ」(佐伯藩は浦からの豊かな海産物に支えられている、という意)と言われるほど、浦々では漁業が近世以前から多様かつ盛んであった。

先行研究によれば、豊後土工は 1910 年代の日豊線の敷設工事を契機にして、旧南海部郡のなかでも上浦で誕生したとされる⁶⁾。同地域はリアス式海岸地帯のため、列車を走らせるには多くのトンネルを掘らねばならなかった。そのために近隣地域で大量の坑夫が募集され、そこに上浦の人々が参画した。工事を通じて上浦の坑夫たちをとりまとめた人物のなかから多くの親方が誕生したが、特に松田菅蔵(1879~1959 年)が地元ではよく知られている。上浦を中心に生まれたトンネル坑夫たちは、徐々に周辺の浦々にも増え始め、同地域中部の鶴見や米水津、そして南部の蒲江などにも多くの坑夫が生まれることとなった。当然それぞれの地域にも多くの親方が誕生している。最盛期は高度成長期と考えられ、1969 年には旧南海部郡の 5 戸に 1 戸は出稼ぎ世帯(主にトンネル坑夫と考えられる)という状況であった⁷⁾。

では、豊後土工はどのようにトンネル工事に参画したのか。すでに矢野彌生をはじめ何人かの同地域の地理学者や郷土史家が指摘しているが、彼らは独特な労働組織形態を持っていた。それは親方を頂点に工長―世話役―坑夫―一人夫という階級であり、彼らはこの組織を現場毎に口コミで柔軟に編成させた。それは地縁や血縁のネットワークであったが、この結果必要に応じて坑夫の数や技術力のある仲間を調達し、「施工主(国など)―建設大企業―「下請け」―出稼ぎ労働者」という縦割の建設構造のなかに入り込んだ⁸⁾。そして数ヶ月から数年単位で現場を転々とし、仕事の合間や盆正月に故郷に戻るといった生活が完成したのである。

もちろん、この組織・生活形態は四半世紀を下らない豊後土工の長い歴史のなかで、常に同じではなかったと考えられる。また、浦単位で細かな差異があったとも考えられ、その変遷や各地域の詳細な実態を明らかにすることは今となっては極めて難しい。ただし近現代において、豊後土工のひとりひとりが職業斡旋業者や公的機関を介さずに、トンネル専門の坑夫集団というまとまりを築けた理由は、彼らのこうした独特のネットワークにあると考えられ、その構造自体には大きな差異はなかったようだ。

次に、彼らが参加した建設工事は、当初は日豊線やその他近隣の鉄道関連のトンネル工事だったと考えられるが、その後は活躍の場を拡げ、後述するように 1920 年代にはすでに植民地・朝鮮まで出向いた豊後土工がいることを筆者は確認している。トンネル工事に特化した彼らは、炭鉱などにも関与したようだが、それ以上に鉄道・道路・水路トンネル・地下鉄などを舞台として展開したようである。戦後は、トンネルと名の付く工事には必ず豊後土工の姿があったが⁹⁾、冒頭で述べたようにトンネル工事の機械化が進むとともに、東北その他の出稼ぎ労働者も合流していくなかで、全体的に豊後土工は数

を減らしていった。

3. 豊後土工と日本の植民地開発

(1) 三又長作と村上春蔵

次に豊後土工と日本の植民地開発の関係を考察する。豊後土工が 1910 年代の日豊線の鉄道工事を通じて成立したという通説を踏まえれば、植民地開発へ出たのは 1920 年代以降と考えられる。しかしながら彼らの足跡をたどるのは容易ではない。そのなかで最も情報を得ることができたのは、佐伯市大入島出身の村上春蔵（1905～1992 年）と鶴見出身の三又長作（1900～1949 年）である。二人とも、朝鮮における日本窒素肥料株式会社（以下、日窒）による巨大電源開発工事であった赴戦江水力発電所（1926 年起工、1930 年本格的発電開始）に関与しており、その後朝鮮で朝鮮人坑夫などを多く抱える豊後土工の親方へと成長していった。以下、それぞれの履歴から考察してみたい。

村上春蔵の家族はトンネル一家として知られており、父・暎松（「けさまつ」と読む。1880～1952 年）、兄・勇（1902～1991 年）とともに家族経営の坑夫組織を立ち上げ、トンネル工事に携わっていた（写真-1）。



写真-1 村上一家（春蔵は右下）¹⁰⁾

村上一家は豊後出身ということで、典型的な豊後土工のように見えるが、そうではない。春蔵の父・村上暎松は、豊後土工が成立するきっかけとなった日豊線の建設以前の 1905 年に、佐伯で親方となって村上組を起こしていた。彼らは 1918 年に間組（現・安藤ハザマ）配下の井上貞次郎の下でなされた京釜線の増若トンネルの掘鑿工事に携わり¹¹⁾、同じく間組の 1921 年に始まった山梨県における樽坪水力発電所建設工事でも活躍した。特に後者では難工事とされた 7 号隧道掘鑿を担当するなど、技術的経験を蓄えていたと考えられる。日豊線の工事以

前から組を立ち上げてトンネル工事に参画している点からも、典型的な豊後土工というよりは、それに先行する坑夫と言えよう。

遺族へのインタビューによれば実質的に朝鮮で仕事をしていたのは一家のなかでも春蔵であり、1926 年以降に赴戦江水力発電工事の水路トンネルに関わった後は、敗戦まで彼が朝鮮で組を率いていたようだ。村上組そのものは大きくなかったようだが、実質的な坑夫ネットワークに支えられていたと思われる。戦後の村上春蔵は大和土建という会社を立ち上げ、兄の勇が率いていた内地の豊後土工ネットワークも継承したという¹²⁾。

次に三又長作をみてみよう（写真-2）。三又家は戦国時代に同地にたどりついて帰農した武士を先祖に持つ家系という。その家督を相続する予定であった 21 代目の庄八（？～1971 年）が大学に入ったため、庄八の姉が養子・福太郎（1867～1936 年）をとり、福太郎は種子島に渡って樟脳製造で生計を立てた。その福太郎の子が長作であり、長作は 1926 年に西松組（現・西松建設）下のトンネル坑夫として朝鮮の赴戦江水力発電所工事に携わった。



写真-2 三又長作（中央）¹³⁾

この後、彼は敗戦まで朝鮮でトンネル工事を仕事とした。朝鮮では大勢の坑夫を抱える親方として活躍し、暮らしぶりも良かったと伝えられている。しかし関与した現場ははっきりせず、敗戦時には西松組の平壤支店を頼って水豊水力発電所から妻子は引き揚げたという¹⁴⁾。長作は戦後に「結核」——おそらくじん肺——を発症し、1949 年に亡くなった。なお、子の福茂は 1928 年に朝鮮で生まれ、戦後は長作の仕事を継承し、西松建設下のトンネル坑夫として働いた後、その流れは庄司建設（現在の三又庄司社長は長作の孫）に引き継がれている。

(2) 施工会社との関係

村上春蔵と三又長作というほぼ同年代の豊後土工たちは、どのようにして植民地への足がかりを得たのか。彼ら二人は日窒による赴戦江水力発電所の建設工事に参画

したが、その建設工事を担った施工会社は間組、西松組、松本組、長門組である。第2章で述べたように豊後土工たちが独特のネットワークを武器に建設会社と強く結びついていたことを考えれば、その結びつきから分析するのが適切だろう。

赴戦江水力発電所の計画者である森田一雄は¹⁵⁾、間組を国内の水力発電所工事で重用しており、赴戦江にも参入させた。しかも森田は間組に挑戦的な工事をさせることでその技術力を引き上げてきた人物でもあり、前述の村上一家が参加した1921年に始まった樽坪水力発電所工事の7号隧道掘鑿などは、森田の要求に応えるために間組が死力を尽くした現場でもあった。具体的にみてみよう。



写真3 7号隧道¹⁶⁾

7号隧道は長さ10kmを超える長い水路トンネルであり、加えて不安定かつ複雑な地形であるフォッサマグナ上に位置するやっかいなトンネルであった(写真-3)。しかも当時の社会経済状況も逆風となった。工事が始まってしばらくすると一連の経済不況の影響によって、当初の請負額で7号隧道の工事を進めることが難しくなったのである。これら技術・経済上の問題でトンネル工事を担っていた当初の親方連が離反してしまった。その時に、間組配下の井上貞次郎の代理人・村上一家が、豊後の石工たちを引き連れてやってきたのである¹⁷⁾。

この工事は間組にとって創業以来最大の水力発電工事であり¹⁸⁾、その最高責任者であった後の間組社長となる神部満之助は、トンネル工場の歌を作り現場で流行させるなど、坑夫たちをあの手この手で鼓舞した。芝居があったやり方はいかにも神部らしいが、それは義理人情を重んじる当時の労働環境の雰囲気をよく伝えるエピソードとも言える。最終的に村上一家は当初の予算内で掘り抜いたというから、客観的にはもちろん、こうした義理を重んじる関係のなかで間組に高く評価されたに違いない¹⁹⁾。

管見の限り、この次に資料のなかで春蔵が登場するのは、1926年の朝鮮・赴戦江水力発電所工事における間



写真4 間組第一横坑における村上春蔵の飯場²⁰⁾

組第一横坑においてである。第一横坑は同水力発電所の水路トンネルのなかでも最も発電所寄りの現場の一つであり、急斜面を横に掘り抜く難工事であった(写真4)。

そのため斜面にへばりついて飯場を設けねばならなかったことに加え、より上流の現場であふれでた湧水がすべて彼の現場へ押し寄せることになった。若干20歳であった村上春蔵は、ここで240名の坑夫を率いて非常に目立った働きをしたようで²¹⁾、各資料に威勢のよい若い坑夫として名前が記録されている²²⁾。

次に三又長作をみてみよう。長作も村上春蔵と同様施工会社——彼は西松組——に付いて朝鮮に渡ったと考えられる。それでは西松組と三又長作を最初に結びつけたきっかけは何だろうか。

西松組の工事履歴を紐解くと、1914年8月以降に日豊線をはじめ多くの九州の工事に関わっていることがわかる。それ以降西松組が合資会社化するまでの約15年間(1914~1929年)における鉄道工事の請負額は合計2350万円で、水力発電・建築・河川港湾・道路橋梁などの合計は2390万円であった。金額比を見ると鉄道の比率が高いことがうかがえる。鉄道工事は74件中39件が九州地方であり、請け負った水力発電・建築・河川港湾・道路橋梁も全体の85%から95%は九州地方の工事であった²³⁾。しかも西松組が請け負った日豊線及び肥薩線をみると、それらの路線は現代においてもJR九州旅客鉄道内の全トンネルのうち47%のトンネルが集中している路線である(新幹線を除く)。西松組の社史に掲載された当時の写真はほぼ全てトンネルであることも考慮に入れれば、西松組は九州の鉄道工事を通してトンネル掘削技術を蓄積したと言えよう²⁴⁾。こうした状況から見れば、三又長作は豊後土工成立の通説通り、日豊線の建設工事を契機として西松組と結びついたか、あるいはそうした工事に参加した人に誘われて故郷を出た可能性が高い。

鉄道が敷かれることは、その地域が急速に近代化することを意味する。当時、旧南海部郡の浦辺の社会はまだ

現金収入の少ない前近代的な社会であった。しかし日豊線のトンネル工事後に帰ってきた坑夫たちは、ピカピカの革靴に真新しいスーツを着て、佐伯から芸者を呼んでどんちゃん騒ぎをするような羽振りの良さだったという²⁹⁾。こうした現金収入の誘惑に多くの人々が惹かれ豊後土工になっていったが、三又長作もそうした資本主義社会の勃興騒ぎのなかで、坑夫となっていったと考えられる。

4. 考察——村上春蔵と三又長作から見る豊後土工の歴史的地域性

(1) 出稼ぎと石積みの文化

次に二人を旧南海部郡地域の地域性との関係から、以下考察してみたい。

三又長作は年齢からも、日豊線の工事以前に坑夫であったとは考えにくい。また長作の父親・福太郎は種子島で樟脳製造に従事していた。樟脳製造は、実のところ旧南海部郡で広く見られた出稼ぎ仕事である。市野瀬ほかの同地域の郷土史家らによれば、この地域の出稼ぎ労働の歴史は、江戸の元禄年間まで遡るといふ²⁹⁾。当初、同地域の人々は九州の山岳部の炭焼きその他の仕事に従事し、その後はナバ山（椎茸造り）や樟脳生産、紡績関連労働などに選択肢を拡げてきた²⁹⁾。この流れの中に豊後土工という出稼ぎ労働も位置づけられる。つまり近現代に成立した豊後土工という出稼ぎ業は、突然生じた特殊な形態というよりは、リアス式海岸地帯で米作などの安定的な生業を持てなかった人々が、歴史的にくり返してきた出稼ぎ業の変転のなかの一コマである、と言えよう。そう考えると、樟脳製造に出た三又福太郎や、1910年代以降に旧南海部郡に起こったトンネル工事を契機として専門坑夫となった福太郎の子・長作は、見事にこの地域の出稼ぎ文化の流れを汲んでいると言っていいたいだろう。

一方村上春蔵は、三又ら日豊線の工事で生まれた坑夫たちよりは、一步早く坑夫の経験を蓄積していた。この点で、村上一家は第2章で論じた松田菅蔵に近いかもしれない。松田は上浦出身の親方で、豊後土工の嚆矢とされる人物だが、彼は日豊線の工事以前に北海道の炭鉱で掘鑿技術を学んでいたとされる²⁹⁾。したがって、松田菅蔵も一步先んじた技術をもって1910年代のトンネル工事にのぞんでいた坑夫であった。

これらを考えれば、日豊線の建設でいきなり豊後土工たちが湧いて出たとは考えにくい。そうではなく、それに先行する手練れの坑夫たちがおり、彼らが親方として旧南海部郡の各地域を東ねていったのではないか。その結果、雨後の竹の子のように坑夫たちが地縁・血縁をもとに育っていったと筆者は仮説立ててみたい。おそらく先に村上や松田のような人物がおり、彼らがその地縁や

血縁を使って仲間を集めるなかで、三又のような新参者たちが順次豊後土工のなかに組み込まれていったのではないか。

以下、推測が続くが、豊後土工たちがトンネル工事に特化していく際にポイントとなった点を考えてみたい。村上の場合興味深いのは、彼が井上貞次郎の代理人として、豊後の石工を率いて樽坪水力発電所の工事に参加した、という事実だ。そこで、村上を樽坪水力発電工事に招いた井上の履歴を紐解くと、彼は国内や日清・日露戦争前後の朝鮮における工事のなかで、石材に関する工事を得意としていた²⁹⁾。例えば京釜鉄道改良工事でも、井上は増若トンネルという難工事の石材工事を担当している。つまり、トンネル工事はもちろん土木工事に必須の石材関連の技術を得意としていた井上は、村上一家が率いた豊後の石工たちを含む労働者らと協働するとともに、時に彼らに支えられていたと考えられないだろうか。

この推測の上である事実に着目したい。それは豊後土工の出身地である旧南海部郡の人々は、歴史的に石積み作業によく馴染んだ人々であった点である。旧南海部郡はリアス式海岸で平地が少なく、急斜面に石垣を積んだ芋の段々畑を代々作るとともに、その背後の山中には縦横にシシ垣を築いてイノシシを防いできた。現在も同地域の集落は石垣がめぐり、過疎化のなかで森に飲まれた山腹の至る所に江戸時代中期以降と思しき多くの石垣やシシ垣が残されている（写真-5）。これらの事情を鑑みれば、旧南海部郡の人々は石を扱う技術に比較的長けた人々であったのであり、村上はそのような技術を持つ故郷の人々を率いていた可能性が高い。そしてそうだとすれば、その石材技術を媒介にして井上貞次郎を支え、その腕をより磨いていくことで間組との繋がりを構築していったのではないか。いまだ推測の域を出ないが、リアス式海岸の小さな浦にはりついて生きてきた人々の素朴な技術が、近代の大型土木工事へと彼らを繋げていったとも考えられるのだ。



写真-5 蒲江町の裏山に残るシシ垣³⁰⁾

(2) 家族主義的で義理人情を重んじる関係性

ところで村上春蔵も三又長作も、樽坪水力発電所や赴戦江水力発電所において特に難工事とされたトンネル掘削を通して評価を高めていた。ここで興味深いのは、彼らと施工会社を繋ぐ義理人情的な社会関係である。

村上の場合は、「間組の興亡がかかっていた」とされる京釜鉄道改良工事の増若トンネル建設においてその石材工事を支えていた³¹⁾。しかもその後の樽坪水力発電所建設ではフォッサマグナ上の難しい長距離トンネル工事で頭角を現し、その経験をもって赴戦江水力発電所の長距離水路トンネル工事に挑み、注目を集めている。彼はこうしたなかで、施工会社と強い結束を育んでおり、それは金銭云々の契約で割り切れるものではなかった。村上一家（正確には一家の長である畷松）を間組に繋げていった井上貞次郎は、間組の名義人であり³²⁾、村上はその代理人であった。こうした施工会社と坑夫や、坑夫同士の間柄を示す「名義人」や「代理人」といった制度名称には、家族主義や義理人情を重視する価値観が色濃く漂っている。

三又長作も、三又家の資料によると赴戦江水力発電所が竣工した1930年、京都帝大・土木科出身で後に西松の社長となる西松三好の名義人となった。ここで西松は三又を親方と認め、家族的な結びつきを強めたのである。三又のもとには後にはかなりの数の朝鮮人坑夫たちが集まったそうだが、これは三又という若い親方を媒介にして現地の坑夫たちと西松組がより強く繋がったことも意味する。

間組や西松組は損得勘定を超えた、いわば家族主義的で義理人情を重んじるネットワークのなかに坑夫の親方たちを関係付け、強力な労働力・技術力をシステムとして取り込んだと考えられる。そしてこの下に、第2章でみたように豊後土工を特徴付ける親方を頂点とした工長―世話役―坑夫―人夫という階級が続いたのである。この構造は、いわば資本主義的な企業論理と、地域の地縁・血縁的なネットワークをかみ合わせたハイブリッドだ。こうした坑夫を束ねた村上春蔵や三又長作と施工会社の関係構造は、赴戦江水力発電所の工事などを通じて植民地にも延長されたのである。そしてそのメカニズムは、末端に朝鮮人や中国人労働者を取り込みながら機能し続けたと考えられる。

5. 結論——日本の植民地開発と豊後土工

本稿では豊後土工の歴史を概説し、その上で村上春蔵と三又長作という豊後土工を、歴史のかつ地域史的な観点から考察した。研究・調査の中間報告であるために、推論などを多く含む論考となったが、今後の作業仮説も含めて全体をまとめれば、次の三点となるだろう。

一点目は、トンネル工事専門の出稼ぎ坑夫集団「豊後土工」という存在の重要性である。本稿で紹介した通り、彼らは近現代日本の土木史上極めて重要な働きをしたにも関わらず、ほとんど知られていない。高度成長期やバブル期にできたトンネルや水力発電所などが耐用年数を超えていくなかで、豊後土工たちの仕事の形跡も消えていくことになる。彼らの歴史を発掘することは急務と考えられる。

二点目は、豊後土工誕生経緯が、地域史と密接に関わっている点である。一般的には建築・土木史や技術史の分野では技術者個人や技術そのものの分析に注意が向きがちである。しかし豊後土工が、ある地域からこぞって現れた専門技能集団であることを踏まえれば、その地域史と合わせた分析が必要となる。本稿で試みたように、豊後土工の誕生契機となった1910年代の日豊線の工事以前に、すでに掘鑿技術や施工会社と関係を取り結んでいる坑夫たちがいた。彼らのような先行者が、豊後土工誕生に大きな役割を果たしたのではないだろうか。また、旧南海部郡の人々がこぞって坑夫になっていった背景や理由には、資本主義社会への熱狂的合一とともに、この地域で蓄積されていた近世以来の出稼ぎの経験や、急斜面で耕作せざるを得ない生活で磨いてきた石積み技術などの影響があるとも考えられる。こうした観点から研究を今後深めることで、旧南海部郡の小さな浦辺の社会と日本を含むグローバルなアジア社会の変容を同時に考察できるのではないか。（写真-6）



写真-6 蒲江・西野浦³³⁾

山の上まで石垣でできた芋の段々畑が開墾されている。

1955年頃の写真。

三点目は、豊後土工のトンネル掘削技術やそのネットワークが果たした歴史的重要性である。発電能力20万kWという1920年代の帝国日本最大の水力発電所である赴戦江水力発電所は、流域変更方式という特殊な発電方式を採っており、それを考案・実践したのは電気技術者・森田一雄であった。流域変更方式とは、黄海に注ぐ鴨緑江の上流・赴戦江を堰堤で堰き止め、そこから朝鮮半島の東海岸に走る脊梁山脈を貫く約27kmもの長いトンネルを掘って導水し、その山脈の落差を用いて発電す

るというものである³⁴⁾。この方式はその後同じく日室が行った長津江水力発電所（第一着工 1933 年，第四竣工 1938 年，合計 33 万 4 千 kW），虚川江水力発電所（第一着工 1937 年，第四竣工 1943 年，合計 34 万 kW）の巨大電源開発に継承された。朝鮮半島の電力事情はこれらの大規模開発で大きく変化し，1930 年代を通じて工業化が進むこととなった。したがって，朝鮮の工業化を語る上で流域変更方式は極めて重要な技術であり，トンネル掘削技術はその核心なのだ。技術者の記録でも，赴戦江の「全工事の死命を制した」のは水路工事と記されている³⁵⁾。この朝鮮の電力事情を転換したトンネル掘削技術の中心に，三又長作や村上春蔵ら，豊後土工らの技術が含まれていたことは記憶に値すると思われる。もちろん，彼らの技術のみで全てを語ることはできない。今後より詳細な検討が必要だが，少なくとも豊後土工はリアス式海岸地帯の鉄道敷設にともなうトンネル工事で技術を蓄え，組織形態を造って施工会社との結びつきを強めた。そしてそのなかで日本の植民地開発にも赴いていたのであり，その技術とネットワークは近代化や植民地化の広い文脈のなかで検討する必要がある。

以上の考察をさらに進めながら，筆者は現在，戦後の日本による対アジア賠償工事も重視し，彼らの足跡を辿っている。現時点で分かっていることは，彼らは高度成長期の国内の新幹線や高速道路のトンネル工事だけでなく，インドネシア他の戦後賠償工事や台湾，韓国などへの開発援助プロジェクトにも参加していたということだ。その点で，赴戦江水力発電所をはじめとする植民地の巨大開発工事の経験は，トップ・エンジニアだけでなく，彼らのような現場労働者にも継承されたと考えられる。だからこそ，彼らの「遺産」は現在も私たちの社会を強く支え，同時に植民地主義や開発主義の記録としても私たちに省察を促している，と筆者は考える。豊後土工は 21 世紀のグローバル社会を展望するにふさわしい，20 世紀土木史上の存在なのである。

謝辞：本稿の執筆にあたり，旧南海部郡在住・出身の住民や豊後土工だった方々に，大変お世話になった。加えて村上春蔵と三又長作の足跡を考察する上で，村上禎氏および庄司建設社長・三又庄司氏には特にお世話になった。記して謝意を表したい。本稿は，JSPS 科研費・挑戦的研究（萌芽）「出稼ぎトンネル坑夫集団「豊後どこ」にみるアジア近現代開発史研究」（研究課題番号：17K18510，代表・谷川竜一）の成果の一つである。

参考文献

1) 矢野彌生：海部の地理（14）人口よりみた米水津村の歴史的考察，佐伯史談，第 168 号，p.20，佐伯史談会，1995 年。

- 2) 山崎喜比古：トンネル建設出稼労働者におけるじん肺多発の過程と要因，日本公衆衛生雑誌，第 30 巻 8 号，pp.336-348，日本公衆衛生学会，1983 年。
- 3) 山岸治男ほか：調査報告 つかふるさとの海へ ―豊後土工の生活史―，大分大学教育学部教育社会学教室，1987 年。
- 4) 豊後土工，西日本新聞，西日本新聞社，1976 年 4 月 26 日～5 月 2 日。
- 5) 筆者作成
- 6) 上浦町生活史編纂委員編：上浦町生活史，p.48，大分県南海部郡上浦町，1983 年。
- 7) 文献 1)，14 頁。
- 8) 文献 1)，p.21。
- 9) 鶴見町誌編さん委員会編：鶴見町誌，p.141，鶴見町，2000 年。
- 10) 間組百年史編集委員会：間組百年史 1889～1945，p.289，間組，1989 年。
- 11) 津田誠一：建設人物史』（上），p.302，建設人社，1967 年。
- 12) 谷川竜一：村上勇子息・禎氏へのインタビュー，2016 年 7 月 14 日。戦後の村上一家は豊後土工としては特異なコースを再びたどった。兄の村上勇は政界に転出して大臣を歴任するとともに，春蔵もその後を追って参議院議員となるのである。
- 13) 庄司建設工業有限公司編：前進，庄司建設工業有限公司，2011 年。
- 14) ただし，長作は敗戦時には召集令状を受けて佐伯で入隊準備中であつたという（谷川竜一：庄司建設社長・三又庄司氏へのインタビュー，2016 年 5 月 7 日）。
- 15) 谷川竜一：電気技術者・森田一雄と水力発電―植民地朝鮮の開発前史として―，土木史研究講演集 vol.37，2017，pp.229-234，土木学会，2017 年。
- 16) 文献 10)，288 頁。
- 17) 小川蔵夫：回顧録，pp.47-48，政経社，1967 年。
- 18) 文献 10)，282 頁。
- 19) 文献 10)，288 頁。
- 20) 藤本梅良：新興の咸南，付録直前頁，新興の咸南社，1929 年。
- 21) 文献 20)，7 頁直前頁および付録直前頁。
- 22) 土木工業協会・電力建設協会編：日本土木建設事業史，p.743，技報堂，1971 年。永塚利一：久保田豊，p.140，電気情報社，1966 年。
- 23) 西松組編：創業回顧，p.3，p.26，西松組，1940 年。
- 24) http://www.mlit.go.jp/tetudo/tetudo_tk2_000027.html および文献 23)，4～5 頁。
- 25) 文献 4)，1976 年 4 月 28 日，14 面。
- 26) 同地域の出稼ぎの変転に関しては，市野瀬の研究が役に立つ（市野瀬仁：米水津村の出稼（一），佐伯史談，第 140 号，佐伯史談会，1985 年ほか）。
- 27) 佐伯産の木炭は江戸時代から「佐伯の白炭」で知られたという。また椎茸栽培の方法は，炭焼きの過程で発見されたという説もある（大分県総務部総務課編：大分県史 近代篇 3，p.257，大分県，1987 年。段上達雄：豊後なば山師の民俗，研究紀要 I，p.100，大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館，1984 年）。
- 28) 株式会社日刊建設工業新聞社編：成豊魂 成功建設株式会社創立 50 年史 豊後土工の誇り脈々と，p.6，成豊建設株式会社，2013 年。

- 29) 井上貞次郎：井上貞次郎自伝，間組，1900年。
30) 谷川撮影。
31) 文献29)，19頁。
32) 組によって微妙に形態が異なるようだが，概ねその組や幹部お抱えの親方のような立場と考えられる。
33) 写真6 西野浦地域づくり委員会：西野浦記，西野浦記編集委員会，出版年不明（写真は1955年）。
34) 谷川竜一：1930年代の朝鮮半島における水力発電所建設技術と建設体制一日室による赴戦江水力発電所建設を通して一，第51回日文研国際研究集会『植民地帝国日本における知と権力』，pp.46-64，国際日本文化研究センター，2017年。
35) 佐藤時彦：土木人生五十年，p.96，中央公論事業出版，1969年。

(2018.4.9 受付)